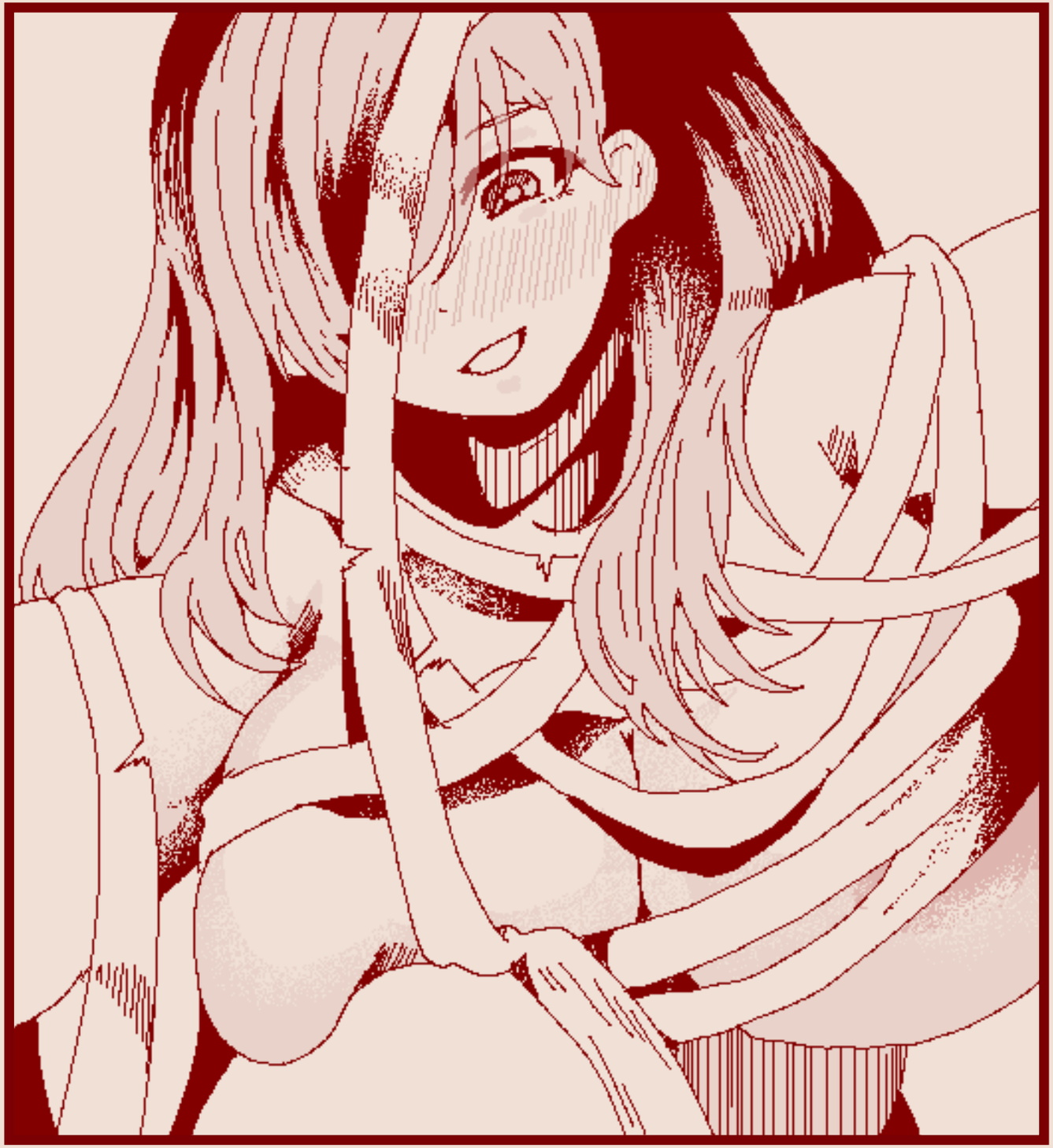


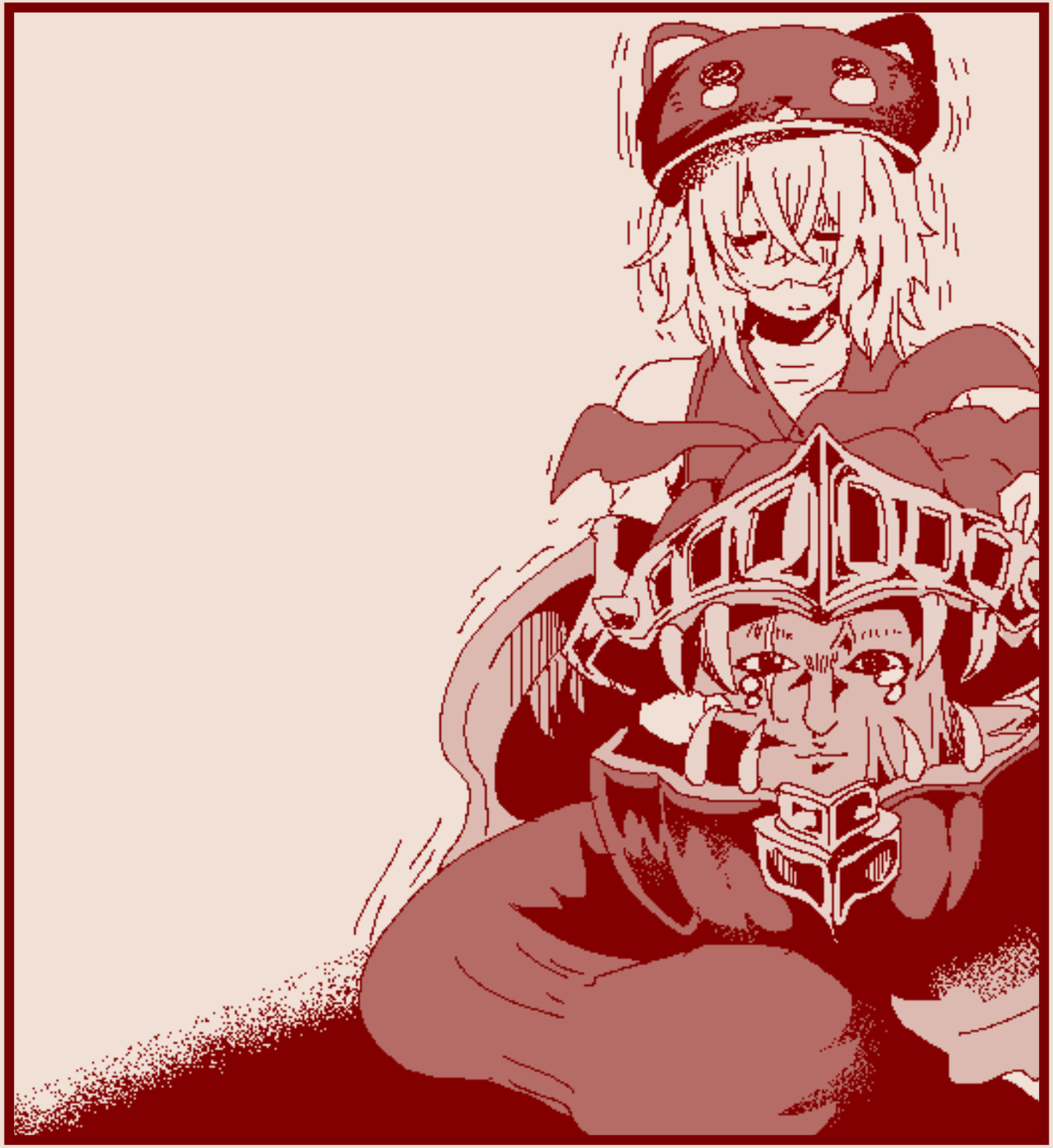
1

　ハロウィン…人間が渋谷で暴れる日でもあり警官も多く治安維持に出動が掛かっている。
　神田 大和とシスタモンノワールさんは、昨年大規模で起こったデジモンによる騒動を鑑みて、騒いでいる人間に乗じてデジモンも暴れないかの監視として長野県警から警視庁へ派遣された。
　…が、少々のトラブルは合ったがデジモンの騒動に限定すればいたって、平和に終わった。
　21 時過ぎ。警視庁電脳犯罪捜査課に引き継ぎをし、同じように他県から派遣された警官と別れ、大和達は飲み屋街へと向かった。
「あっ大和さ〜ん、シエルちゃ〜ん。」
「ママ〜〜〜!!!」
「ブッブッブッブッブッブッブッブッ」
　待っていたのは、伊吹 ねんりとカブトシャコモンであった。
　先に、デジモン絡みのストーカー事案に対して大和が対応した事もあり、それからは予定等合えば何度か食事をしていた。
　ノワールも大和と共に自分を甘やかす対象としてねんりを大層気に入っていた。
…逆にカブトシャコモンからは大和含め怨嗟の籠った視線を向けていた。
「すみません…同席させていただく連絡が遅れてしまい。ここまで来るのも人も多くて大変だったのでは？」
「いえ、いえ元々誘ったのは私だったので〜。」
　ねんりが柔らかい雰囲気で受け答えをする。大和は普段堅苦しい自分と適当を極めたようなパートーナーデジモンが日常の大半を占めているせいかねんりのこういった柔らかい雰囲気を好ましく思えた。
「それに、お仕事でしたので…ばぁ♡」
　ねんりが、コートを捲るとそこには裸体に包帯を見につけた豊満な肢体を露わにした。
　ねんりの職業は AV 女優であり、先まで仕事をしてそのまま来たと言う事であった。
　それを見て大和は首が捥げんばかりに首を横に向けた。童貞純情男にはいかんせん刺激が強かった。
「すっげええ!!!すっげええ!!ですよ大和様!!!！マジ…すっげえええ!!!!???」
　語彙がカスになったノワールがバンバンと大和を叩き興奮している。
「そ!!!そのような!!!!!服装は公然猥褻に!!!!!なる可能性が!!!!!」
　普段の小さな声しか出せない大和が必要以上に大きな声を上げた。余程焦ってたのであろう。
「大丈夫ですよ〜、包帯状のスカート衣装ですし、それにニップレスとかでちゃんと隠すとこは隠してますよ？せっかくのハロウィンだし驚かせようと思ったんですけどどうですか〜？」
「にににににに似合ってます!!!!!!!!!!」
「もう〜見てないじゃないですか〜。」
「オラ!!!似合ってるとか！ご褒美にファックしてやるとか言えないんですか！このどうて・…あたたたたたたt!!!!!」
「婦女子の方に掛ける言葉ではありません…！下品ですよ…!!!！」
　照れ隠しも兼ねて大和はノワールにアームロックを決めた。それをねんりは楽しそうに見ていた。



2

　予約した居酒屋の個室に向かって1時間、ねんりは完全に出来上がっていた。
　ワインボトル5本、焼酎2本、熱燗5本、生大ジョッキ、3本。
「あの…呑み過ぎでは？」
「え～このくらい普通ですよ～？」
　ねんりとは昼食を何度か共にしたが、呑みをするのは初めてであり、まさかここまで呑むとは大和達は露とも知らなかった。
「え…ママってマジで普段からあんなに呑むの勃起貝？」
「ん？人間とはあのくらいアルコールを摂取すのではないのかカス？というか近えぞあのマーダーフェイス!!!!なんとかしろよカス!!!」
「それより大和さ～ん？」
「は…はい。」
　しな垂れてくるねんりに対して大和は猛烈に嫌な予感がした。
「なんでさっきの衣装見てくれなかったんですか～？」
「いえ…み…見ました!!確かに!!!」
「え～今もそうですけど、全然見てくれないじゃないですか。」
「い…いえ！そそそんアことは…！あの…恋人でもない相手にその距離感は!!!呑み過ぎでは!?」
　下戸であまり呑んでない大和はねんりと同様のアルコールを摂取したかのように赤面していた。
「え～聞こえませ～ん。大和さん肝心な事は、いつも以上に小声じゃないですか～。」
　そう言うとねんりは愛撫をするかのように大和のゴツゴツとした指の間にしなやかに柔らかい指をねっとりと絡め取り握った。
　指と共に精神的にも絡め取られるように大和は思った。助けを求めるように、カブトシャコモンにプロレス技を掛け黙らせていたノワールに助けを求めた。
「…！。はい！ママ!!大和様はこれ以上の飲酒はやめて俺のマンミルクを飲ませてやるぜ！と言っておりま「言ってません!!!！」
「ぶ～、ノワールちゃんにはそうやって大きな声で返事してくれるですね～。」
「いや…だから!!!！自分は!!!！…ぶっ!!!!!」
　大和がねんりに振り向くとそこには先ほどの包帯を巻いた状態のねんりがいた。
「!!!?????」
「ふふ～だから言ったじゃないですか～見てないって。着替えた服の下にも着てたんですよ？」
　よく見ると上着…更に下着…果てはニップレスも転がっていた。



3

「ふふ…大和さんかわいい顔〜。」
　ねんりの顔がどんどん大和の顔に近付いてくる。
　あまりの状況に脳が追い付いていない大和は鯉のように口をパクパクしていた。
「いけーっいn…ママ!!」
　囃し立てるノワールと脳が破壊され涙を流すカブトシャコモンが見守っていた。
「可愛いって言ってくれない上の口なんていらないですし塞いじゃいましょうね〜。」
「…！」
　ねんりの大和の唇が紙一枚の距離に来た瞬間であった。
「…すいません。吐きます。」
「へ？」
　…次の瞬間には、大和の顔いっぱいに吐瀉物が浴びせられた。
　幸いな事に押し倒された際に大和の上着が捲れておりその範囲に全ての吐瀉物が撒かれ、店には被害がでなかった事であった。
「うわ…。」
「ねんり、ゲロを吐く君もまた、女神だ…。」
　その後、ねんりに散々と謝罪された大和であったが、その性格には珍しくゲロらなかった先を夢想し、また呑みに行く機会はないだろうかと心の片隅で思っていたという。